

「日本写真保存センター」調査活動報告 (13)

長崎原爆の山端庸介の写真原板・津山の江見写真館の乾板を収蔵

松本 徳彦
(専務理事)

原爆を記録した山端庸介の写真原板

9月6日、「長崎原爆」の実相を記録した山端庸介(1917~66年)の長男山端祥吾氏から、昭和20年8月9日11時02分長崎市浦上松山町上空で炸裂した原子爆弾で、一瞬のうちに18,409戸の家屋が罹災し、120,820人もの死傷者が出た。その惨状を撮った父庸介の写真フィルム(ホルダー3本、68コマ)と、その翌年復興状況を撮ったフィルム及び複写したガラス乾板90枚が、当保存センターに寄託された。

この写真原板は原爆投下の翌10日の早朝から夕刻までの約12時間に撮られたもので、原爆の惨状を克明に記録した世界に唯一しかない貴重な写真フィルムである。

山端が長崎でとらえた原爆記録のフィルムは115コマが印刷物等で確認されているが、現在残っているものは寄託された68コマ(ホルダー数にして3本)だけである。このフィルムのパフォーレーションにはA9(31コマ)、A12(6コマ)、A13(31コマ)の手書きされた番号が付されているので、実際に撮影された本数は少なくとも、欠けているA10、A11を加えた5本あったと推測することができる。A9のフィルムを詳細に確かめると、現像中にフィルムの一部がくっ付いて現像されないまま定着され、画像に斑や気泡が生じている。A13ではもっともよく使われてきた「おにぎりを持つ親子」(A13-2)と「おにぎりを持つ少年」(A13-1)の間の2コマは現像時のカブリで画像を見ることができない。また、フィルムの天地を逆さまのまま番記されて、撮影順序通りでないことが分かる。A13-19~24でも、プリント後にネガを天地を逆にしたままネガホルダーへ納めたため、ネガ番号を間違ったまま手書きされたことが分かった。



A13-2 炊き出しのお握り一つ。食べる元気もない。



A9-4 爆心地付近の被害状況。石の鳥居だけが不思議に原形をとどめていた。

山端の撮影メモによれば…

山端は昭和20年8月1日に東京を発ち、連日艦載機による攻撃を受けていた東海道線を避け、中央線で名古屋を経由して大阪に行き、5日夜、広島を通過して6日博多に着いている。その日のうちに福岡の西部軍報道部に着任し、6日朝、広島に原子爆弾が投下され壊滅的な被害を受けたことを聞き、半日遅れていたらどうなっていたであろうかと安堵する。着任から4日目の9日昼食後に、長崎にも新型爆弾が



山端祥吾氏

落とされ被害が出ていることを聞かされ、この様子を記者の東潤、画家の山田栄二と写真の山端の3人で記録していくように指令され、長崎に向けて出發した。約12時間かけて10日の午前3時ごろ長崎の手前の道ノ尾駅に着く。薄明かりの坂道を徒步で下り、約2時間かけて憲兵隊に赴き被爆状況や救護状況などを聞き、それぞれ分かれて被爆地を取材して回る。焦土のあちこちで火が燃え続け、屍が累々とするなかから「助けて…」「水を下さい」と声を掛けられるが、何も施すことができないもどかしさを感じながら、悲惨な状況を撮影し、博多には重傷者を病院へと護送する列車に同乗して着いたのは翌11日の午前3時であった。

現像処理は12日に行ったが、同僚で報道班員の火野葦平は、この写真が軍部によって国民の志氣を鼓舞するために利用されることを避けるため、山端にフィルムは部隊へは渡さず東京に持ち帰ることを勧めた。その後、約7年間封印されたまま、山端宅で保存してきた。



A13-19 爆心地付近で焼死した少年。

後世に語り継ぐ貴重な遺産

敗戦後の9月19日、GHQは占領軍に対する批判を報道することを禁じるプレスコードを発し、原子爆弾の被災状況などは公開することができなかった。昭和27年8月の対日講和条約の発効で、これまで発表が許されなかつた原爆被害写真を『アサヒグラフ』(8月6日号)が特集。続いて『広島・戦争と都市』(岩波写真文庫)、『サン写真新聞』(8月9日号)と山端の写真集『写真記録 原爆の長崎』(編集:北島宗人、発行:第一出版社、昭和27年8月15日発行)が発刊され、原爆の悲惨な事実が公開され大反響を呼んだ。同年『LIFE』誌も山端の写真を使って原爆特

集号(9月29日号)を発行し、アメリカ人に初の原爆被害状況を伝えることになった。

この写真原板は、わが国にとっても世界人類にとっても2度と起こしてはならない過ちを記録した貴重な遺産で、後世に語り継ぐ写真として末永く保存し続ける責任を負うことになった。

この筆舌に尽くしがたい原子爆弾の惨状をとらえた写真の一部をここに紹介し、写真による記録が如何に大切なものであるかを実感していただきたい。

*キャプションは『写真記録 原爆の長崎』に記載されたもの。



A9-26 8月10日午前6時頃、稻佐橋付近。負傷者の収容がやっとはじめられた。



A9-22 負傷者は順番を待つのも放心状態だった。道ノ尾駅前。8月10日午後2時頃。

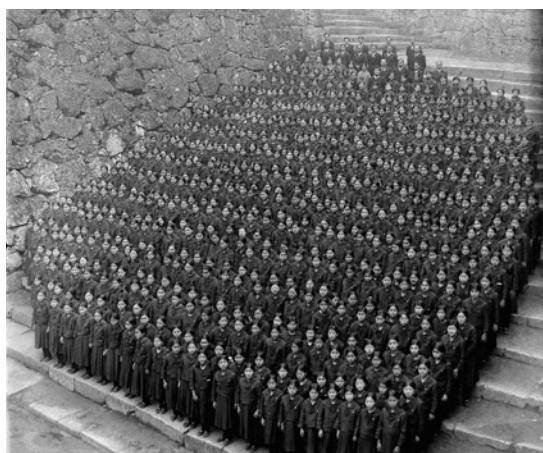


A9-8 市の連絡員がもって来た少量の水を廻し飲みしている。8月10日午後2時頃。

明治・大正・昭和三代にわたるガラス乾板 津山市江見写真館

岡山県津山市で明治7年創業した江見写真館の三代目江見正(明治23年～昭和52年、87歳没)が、明治、大正、昭和の三代を撮り続け、人々の暮らしから、町の風物などをとらえた8,000枚に及ぶ四つ切とキャビネ判のガラス乾板78枚とフィルム(長巻)9本を、五代目の江見正暢氏から寄贈を受けた。祖父正は津山中学を卒業後、明

治大学予科に進み、東京の森川写真館で修業し、大正の初めに津山に帰り跡を継ぎ家業を盛り立てた。ハイカラでお洒落、外国製のオートバイを乗り回すかたわら、伝統的な古式泳法の普及に尽力するなど多趣味な人物であった。撮影範囲も広く営業写真の人物撮影から役所の依頼による公共建築物、水道、鉄道工事、祭事などと名家の結婚披露宴、市内の学校行事、集合人物撮影など多彩。大正昭和期の町の日常と暮らしぶりを写した貴重な写真原板の70枚を収集した。



「津山高女生徒の集合写真」昭和10年 四ツ切乾板

写真には歴史的な記録から、撮ったときはさほど価値を見出さない写真も、ときが経つことでその画像から当時の記憶を甦らせ、「記録の重み」を実感し、再評価されるものがある。日本写真保存センターでは、こうした大事件から日々の暮らしを記録した「写真原板(フィルムや乾板)」を収集し、データベース化して利活用するアーカイブの構築を行っている。皆さんの家にも仕舞われたままになっている「眠っている写真原板」があるはずで、その発掘にご協力ください。

公益社団法人 日本写真家協会

TEL: 03-3265-7451 FAX: 03-3265-7460